UFOと宇宙哲学の研究誌

－日本GAP－

ニューズレター

No.38

ＵＦＯと宇宙哲学の研究誌
日本ＧＡＰニューズレター　　テレパシー特集号

第３８号目次

肉体の意識の変換（Ⅱ）……G・アダムスキー　1
ＵＦＯの推進力……村山光一　3
テレパシーこそすべてである……今野喜一　7
テレパシーの体験・実験記録……山本佳人　9
テレパシーの特異な体験……いぶきのり子　17
毎十分想念観察法……久保田八郎　20
〝テレパシー〟を読んで救われた……堀川とき　24
思念と奇蹟……巽　直道　26

肉体の意識の変換　2

G・アダムスキー

われわれの知的または肉体の意識は理解力に欠けるけれども、偉大な力を持つ。そして理解力に欠けるがゆえに破壊において強力な要素となるのである。暗黒中で働いているので、肉体の意識は絶えず手探りを続けて、さまざまの誤った憶測をするようになる。

われわれがいと高きもの、すなわち〝因なる意識〟に服従するとき、最初は子供が成長するにつれて導かれるのと同じようにわれわれも導かれるが、やがて次第に多くの力を得るようになり、その力をよき生き方のために用いることを知るようになる。電気技師になりたい少年は勉強をみてくれる先生につき、先生はどうすればよいかを本人に話してやらねばならない。すると少年は学ぶにつれて向上してゆく。少年があまりにせんさく好きで自分一人で学ぼうとすればあちこちで感電するだろうが、電気の法則を学ぶにつれて訓練を受けなかったにしても、さほどのケガはしないだろう。

これは電気と呼ばれる力を制御する知識を先生が生徒に伝えていたからである。少年は制御できない状態から完全に制御できる状態にまで一歩一歩導かれた。そして自己の知識を知恵として応用し始めている。もはや電気の力は少年を傷つけはしない。力が本人に服従しているからだ。本人はどこでもいつでもその力を応用することができる。

われわれが現在の状態を克服する力を持とうとして自分自身を変換させるには、自己の生命を偉大な〝宇宙の技師（全体的意識）〟に服従させねばならない。すると因の意識がわれわれにすべての事柄を説明してくれるのである。われわれが注意を払うならばより広大な理解に生長し、万人の利益のためにこの力を応用するだろう。われわれは知的想念を召使いたらしめるように制御する方法を知るだろう。少年が電気の制御法を学ぶには電気のあらゆる法則を知って理解しなければならなかったのと同様に、知識はわれわれの力（複数）の制御に至る道なのである。

神は人間にあらゆる物事を得る方法を与えたが、人間はそれがどうしてなされるのかを知らねばならない。われわれが〝父〟の方へ帰るのは機の熟した時なのである。人間は自分が持つ力で狂暴化しつつある。それに気づかないで人間は戦争やあらゆる種類の破壊におちいっている。因の意識とは、地上に平和をもたらすために、あらゆる問題に対する答え方や諸状態の修正の仕方を知っているところの源泉である。

人類にとって唯一の希望は、人間が意識を変換させて再び生まれかわることにある（注＝肉体の生まれかわりではない）。これを達成するには意志の力を用いねばならぬ。意志の力はこの目的のためにのみ与えられたからだ。つまり自分の知的意識を今より〝父の意志〟に強制的に従わせることなのである。そうすればわれわれの生命はその力を反映し始めるだろう。それはどのように

して可能なのか？　われわれは肉体の苦痛が顔に反映する。同様にしてわれわれが感じる善はわれわれの生命中に反映するのである。

より高い意識に導いてもらうことによってこそ、われわれは諸状態を制御することが可能となる。かつては破壊的に用いていたこの力を制御することになるからだ。あなたは理解を深めるにつれてその力を建設的に用いるようになる。そして良き状態を作り上げる。街路の人々を見るがよい。不安そうに心配そうにし、どの道へまがればよいかも知らないではないか。これは人々が想念を支配していないで、逆に想念に支配されているからである。

より高い想念に支配されることによってこそ正しい接触に導かれ、万物が善であるという認識に到達するのである。この認識によってあなたの顔には微笑が浮かび、力または活気が与えられるので、あなたは飽きることなく永遠に前進できるのである。

だがあなたはこの意識中の機能に自分を服従させるように意志の力を用いねばならない。古い時代にはこの法則の応用法を心得ていた賢明な母親たちがいた。自分の息子や娘たちに教育を授ける方法を持たなかったので、偉人の像の所へ子供たちをつれて行き、偉人について語ったのである。そして子供たちにこの偉人と同じ人間であり、偉人と同じ事がやれると感じさせた。すると子供たちは少しずつその意識を取り入れ始めて、ついに彼らの感じはきわめて強力になったので、偉人と同じ人間になろうと思うようになった。次第に彼らは自身の内部の力について意識的になり、うまくゆくと感じた。われわれが意識を変換できるのは言葉によるのではなく感じによるのである。

われわれは自分の行為が正しいと確信しなければならない。われわれは無我の表現に通じる悦びを感じなければならない。われわれは〝感じ〟というものがコントロールされるとき、意識である〝感じ〟を通じて成長するからだ。そのときわれわれは自分が感じるとおりのものになる。自我は意識的な想念によって変換されるからである。

たとえばあなたが偉人の面前へ出ることになったとしよう。あなたが自分を取るに足りぬもので相手は偉人なのだと感じるならば、あなたは小さくなるだろうが、反対に自分が相手と等しい人間だと感じるならば、向かい合って相手を見つめながらしかも完全な気楽さを感じることができるだろう。われわれは何事につけてもこんなふうに感じるべきである。大統領といえどもわれわれと同様の人間ではないか。その地位を永遠の生命と比較すればゼロに等しいものである。とにかくあなたが自分を偉人のように感じるならば偉人と同じ波動を放って働いているのである。すると偉人はあなたの望む物を与えるだろう。

あなたが就職する場合、経営者があなたより優位にあると考えてはいけない。「この者は卑下しているのだな」と経営者が感じたら相手は自然に虚勢を張るようになり、あなたを利用するようになる。経営者と同等の立場に立て。そうすればあなたを正当に扱うだろう。だれに対しても自己を卑しめるな。あなたは隣家の男と全く同様に〝天の父〟の御子である。神はえこひいきしない。われわれは〝感じ〟を通じてのみ、より偉大な人間になれることを知る必要がある。神の前で起き上がって立て！　しりごみをするな！

神がわれわれに与えた意識をわれわれが感じるとき創造主と等しくなるというのは略奪ではない。それはイエスも言っている。そうすると、意識が高度な自我に変換されるとき仲間の男と同等であると感じるのも略奪ではない。このときあなたは次第に苦痛、悲しみ、その他あらゆるマイナスの状態を排除することになるのである。

われわれが〝父〟の息子であり娘であることや、神の力が無限なるがゆえにわれわれの力も無限であることなどを教えてくれるのは、より高度な知覚力である。この知覚力を通じてわれわれは楽しくなることを知る。神が常に供給者であることをわれわれは知っているからだ。われわれは安心して生きる。決して心配しない。心配するのは肉体の意識にすぎない。それは良き物事を知らないからである。

宇宙的な想念の中に生きる人は常に安心して、常に喜んでおり、接触するあらゆる人にその喜びを放っている。その人は自分の疑問のすべては解決することや、自分が生命の道を導かれていることなどを知っている。利用すべきすべての力が自分のためにあることを知っている。

われわれはすべていつかは宇宙の法則を知らねばならないが、これまで傷ついてきたので法則からのがれようとした。だが法則に従って働くことを知ろうとすれば、自由意志を〝父の意志〟に導かせるようにしなければならぬ。そうすれば自分の全存在を変換させ始めることになるだろう。われわれは今この地上に天国を見出すだろう。

（完）

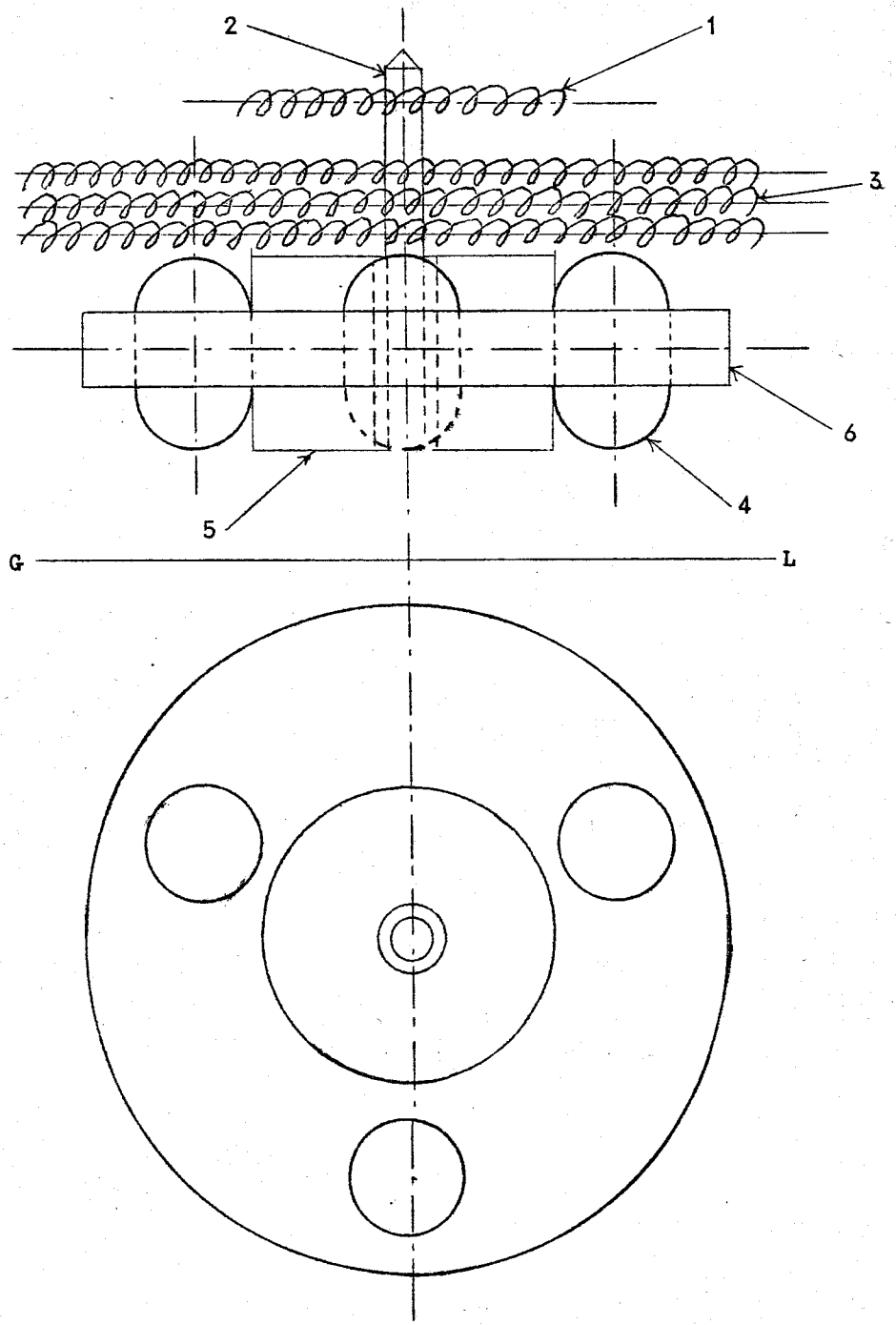
ＵＦＯの推進力

村山光一

アポロ宇宙船の月周回及びソユーズ宇宙船のドッキングも成功し、一方ではアメリカコンドン委員会のＵＦＯに関する研究報告も提出され、宇宙時代深まるの感深い今日この頃である。先号〝量子流体宇宙船〟の論文で、重力場推進宇宙機の大要を述べたが、スペースブラザーがＵＦＯに用いている推進方法も、同じく重力場推進であると考えられるので、アダムスキーの円盤の内部構造図を照合しながら解析してみよう。

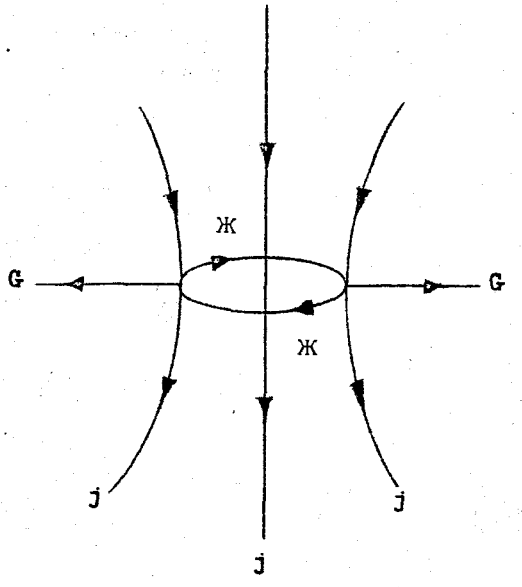
ＵＦＯが重力場推進を用いているらしいことは柴野拓美氏も文献(1)で指摘されている。まずアダムスキーの残した図面と写真（たとえば文献(2)の巻頭図と巻頭写真）から、内部構造は、エンジン部分だけを取り出すと、第1図のようになっている。図面や写真の真ぴょう性を疑う方があるとすれば、これから合理的な説明が出てくれば、その真ぴょう性が確認されるし、逆ならば逆である。第1図は(1)パワーコイル(2)円柱磁石(3)コンデンサーコイル(4)電極用コンデンサー(5)強磁性体（たとえばフェロクスプレーナまたはフェライト）及び(6)強誘電体ブロック（チタン酸バリウムまたはロッシェル塩）から成っている。(4)をアダムスキーは着陸用ギヤーと呼んでいるが、スペースブラザーのファーコンが「この架線の中、三本は磁極から機体の下部にある着陸用の三個の球にエネルギーを伝達します。この球は中空で、最大の目的は磁極から送られる静電気のコンデンサーとして使用される点にあります」

第 1 図



（文献(2)の42頁）とも言っているのでコンデンサーである。ではなぜこれらは3回対称に配置されているのであろうか？　たとえば地球で用いられている三相交流誘導モーターの3個のコイルは3回対称に配置されているが、これは三相交流を用いるときの技術である。各球に三相交流の各相を充放電すると、中心に回転電場が生じる。これは誘導モーターの中心部に回転磁場が生じるのと同様の理由である。更に、電磁誘導の法則により、電場が回転すると、磁場も回転の成分が生じる。また鉛直方向に静磁場がかかっていることは、やはりスペースブラザーが文献(2)の37頁で「この円柱の頂上は、普通は陽極になっていて、ごらんのように末を突き抜けている下部は陰極になっているのです」と言っていることから傍証される。以上を総合して、UFOの中心部にかかっている電磁場は、(1)回転電場(2)回転磁場及び(3)鉛直方向静磁場の三つである。コンタクトストーリーに機体の回転するUFOの話があるが、回転しているのは場であって、エンジンそのものは固定されている。この点アダムスキーの叙述はしっかりしている（文献(2)及び(3)参照）。さて、この電磁場をチタン酸バリウムとフェライトの振動子(5)及び(6)にかけると、先号の方程式（2－1）に従って、鉛直方向に振動子の確率密度j（文献(4)参照）の流れがそろう。もっとやさしく言うと、エーテルの流れがそろう。するとそのまわりに縦スピンЖ（文献(5)参照）の循環ができる。更に、重力場（地球のでなく振動子の）Gから、縦スピンЖに右ネジを廻すと、前記の流れの方向に一致するとの法則（重力場の右ネジ法則。文献(5)参照）があるので、残りの自由度として振動子のまわりの重力場Gは外向きになる（第2図参照）。外向きの重力場は反重力場と呼ばれ、地球に反発される。縦スピンЖの循環をしっかり保持するために、ドーナツ状磁場をその循環につれて一周させる。これが(1)パワーコイルの作用である。その磁場は非常に強くなければならず、一千万ガウス程度必要である。これは導体電流では不可能なので、変位電流を用いて作る。さて以上から、第2図の場合は、地球に反発されて機体が浮上するのである

第 2 図



が、その力の大きさは次の事情から計算できる。確率密度流Jに地球重力場の加速が働くと、そのエネルギーが場に流入する。その割合から先号の（3—1及び（3—5）式に従って

$$dW/dZ = mg - S/C$$

の推力が得られる。ただしmは振動子の換算量で、Sは輻射損失である。すなわちmgダインの引力のかわりに、mgダインの反発力を受けるのがこのエンジンの特性である。UFOはこの力で浮上するのであろう。

参考文献

(1)柴野択美「科学読売」一九五九年八月号　読売新聞社
(2)G・アダムスキー「空飛ぶ円盤同乗記」　高文社
(3)G・アダムスキー「空飛ぶ円盤実見記」　高文社
(4)富山小太郎「現代物理学の論理」　岩波書店
(5)清家新一「第二十一回日本物理学会年次講演集5」　日本物理学会

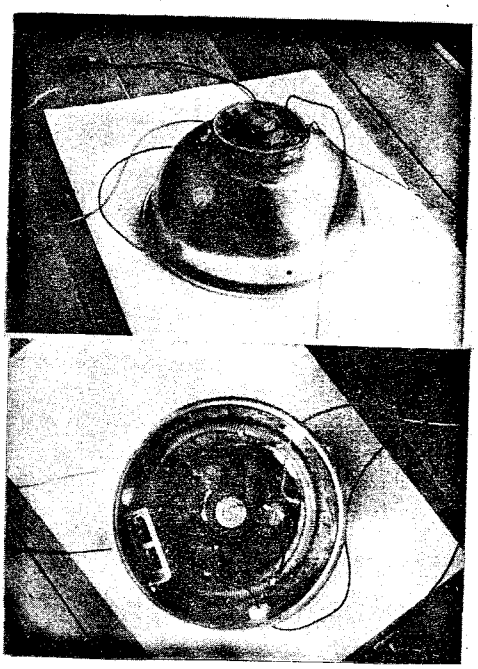
筆者追伸

UFOの模型につきましては、先般は五万ガウス程度のパルス磁場しかできませんでしたが、新たに一兆ガウスの磁場を作製する方法が判明しましたので、更に改良しつつあります。（一月一日）

当方オッシロスコープを購入致しまして、所題のエンジンの観測に便利となりました。同封の写真はそのコンデンサーコイルの自励振動の波形です。（約一〇キロサイクル）（注＝下の写真ではない）

（三月十四日）

村山氏製作の円盤の模型



村山光一氏

テレパシーこそすべてである

今野喜一

もう十一月も過ぎ、十二月になろうとしていますが、今までの最後の手紙を出して以来、どんどん自分自身が変化しています。そこで今までの成果を述べようと思います。

すでに自分自身がテレパシーによる生活体系に入ってしまっているということに気づきました。そして「テレパシーこそ（想念波動こそ）すべてである」ということにも気づいています。抽象論哲学という僕の創り上げた思想体系もテレパシーであることがわかりました。また現在数学も歓喜をもってやっていますが、これも最終的にはテレパシーであることがわかりました。つまり言葉になる以前の〝感じ〟を完全にのみこむことができるようになったことです。神の概念もほぼ完全にテレパシーにより理解され、あとは深めてゆくだけです。とにかくあらゆることに対するテレパシーが開花し始めています。頭も到る部分がピーピーザーザー鳴り、一日一ぱい鳴っています。理解力の向上が急速に進んでいるように思われます。また到る所に不思議さ・不可視さを抱き、科学ではどうすることもできないものを感じます。透視・予知・透聴などは前よりよくなってきました。聖書を読み、キリストが進化した人間、特に霊的な想念波動に同調している人間であることもわかります。最初のころはG・アダムスキーの宇宙思想が地球の科学と感覚があわないのを感じましたが、今はすでに地球の科学と矛盾しなくなりました。また地球の科学の特徴もよくわかるようになり、科学的という立場から神を見出すことができない理由もわかりました。またもう一人の自分が、あたかも自分が自分の主人であるかのように思わせるほどに自分をあやつっていることもわかりました。結局、生物を学べば学ぶほど、自己の不可視さや無限の力を感じないわけにゆかなくなり、また脳の図を見ながら意識的に他人を見ていたらものすごい恐れを感じてしまいました。人間が霊的実在であることを深く感じて、自分自身の実体にびっくりします。この地球の想念波動体系がどのようなものかの絶対的な意味を見出すこともできるようになりました。今までずっとテレパシーによって超能力の可能性について調べてきましたが、そのやり方がわかってきたので、テレキネシス（注＝念動作用。手を触れたりその他物理的な力を加えないで想念の力によって発生する運動）やテレポートに進もうと思います。そして最終的には病気を一瞬のうちに治すようになりたいと思っています。現在の方法では治すのに少し時間がかかります。個人的欲望もなくなり始め、他人に対して尊敬やあわれみを感じるようになっています。四次元に対する概念もテレパシーの向上により非常に理解力が増しました。

それから僕のクラスにもう一人僕と同じような人がいることがわかりましたが、その人はやはり僕のようにテレパシーが発達しています。自然科学と語学に対するテレパシーが特に発達しており、頭が鳴り出したのは高校前期のころだそうで、透視・透聴その他の力を持っています。このことは僕に非常な力を与えました。結局、人間にとってテレパシーによって理解力を向上させること

こそすべてであり、その向上の程度に応じて無限なるものがその人に与えられるように神は人間を創っている、と言うこともできます。現在は「脳の勉強」をテレパシーによって行なっています。そうしないと背後の自分がささやくからです。勉強においては、すべてに共通であるが、強制されずに情熱でもって行なうことこそ来世への飛石になるものであると確信します。そのうち前世の記憶がよみがえると思いますが、永遠の若さを保つ方法も訓練しています。記憶を不滅にすることも。

人間に働いている法則もわかるようになり、人間関係において応用しようと思います。クラスの人達とこの世界について話し合うたびに地球人の苦悩を身にしみて感じます。また利己主義思想がよくないということに気づいている人もいますが、これを除くことは不可能だという人、人間に利己がなかったら人間でないと怒る人、歓び一つの世界のだけの人間を悲しく思う人、悲しみ・喜び。苦悩があってこそ人間の世界だという人、こういう人達がすべての地球人の一人一人だと思います。そして彼等の心を非強制的に長い時間かけて「愛」と「歓び」をもって彼等と一緒に生活しながら変化させる以外にこの地球を救うことはできないとつくづく感じます。学生運動は北大にもありますが、彼等の心は完全に背後にあるかくれた実体によっておこる満たされない気持がそれを満たそうとして戦争反対の方向へと傾いていることがよくわかりました。たとえ戦争がなくなり平和になったとしても、この「満たされない気持」は地球がある限り続くでしょう。そして結局は破滅へ向かうでしょうが、これもやはり神の法則にあてはまっていると考えます。

（四三・一一・三〇）

函館に帰ってG・アダムスキーのいろいろな書物をもう一度読み返しているうちに、今年の一月始めごろから全く新しいテレパシーを受け取るようになり、急速に変化してきました。現在テレパシーの能力も活発になり、知覚力も増大し、動作の瞬間にはテレパシーがどんどん来るようになりました。聖書の創世記は自己の心の追求によって得られたものと思うのです。というのは、宇宙の始め終りということは、地球式時間空間でみれば意味をなさないからです。僕はついに地球式時間空間とは全く違う時間空間の概念に到達しているからです。これによって「永遠の一日」という意味すなわち宇宙人が言ったことをより明確に理解できるのです。「自己と万物は一体である」という金星人思想は地球の哲学の唯物論唯心論の二つとも全く根本的に違います。これらの関係は「意識の投射性」という僕の独特の考え方により説明されます。今までずっと地球の科学の意味するところのものを研究し、今もしていますが、地球の科学の特徴である「客観性」ということは一つの想念波動体系にあります。このことの意味がよくわかるようになったので、僕にとって「不可能」ということはなくなりました。地球人が言う「主観客観」がどのようなことなのかがテレパシー分析によってよくわかるようになり、これらはすべて意識の投写性によって説明できますが、少し複雑なので省略します。

（四四・一・一六）

テレパシーの体験・実験記録

山本佳人

（一九六八年五月二十二日）

夜、床に入ってまだいろんな考えをしている時、私は神秘的な体験をした。目を閉じて平板なまぶたの裏の暗闇がその時に限って随分奥深いものに思われた。（最近その闇に〝何か〟が表象しようとしていたので、そのうちに何かの映像を見ることができるのではないかという感じがしていた）

すると突然、その中空に完全な鮮明さを持った白い映像が出現したのである。映像は私がそれに注視して確認しようとしても消失してしまうようなことはなく、かえってその鮮明度を増すようにさえ思われた。形はハッキリしていた。初めて見るもので、何と表現すべきものか言葉を見出さないが、ゾウゲ色をしていて受話器に非常に似たものである。私は不可解な気分でそれに注視すると、しばらくしてそれは消滅していた。しかし私はまだ何かが出現するような感じと、今なら自分の意志によって望む場所のありさまを見ることができるような信念を持ち始めていた。

二、三度まぶたの中の空間が揺れたような気がし、うっとりした何かが心の中を今すぐ通り過ぎて行くような楽しい気分になった。それと同時に二度目の映像があまりにもハッキリと出現したのである。まるで目をあけたまま肉眼で物体を見たように鮮明であったので、もし今ここで目をあけたらこの映像が消えてしまいやしないかという不安に襲われながらも、目を開いて或る事がハッキリと判った。その或る事とは、確かに今まで目を閉じていたこと、その像に似た物体などこの部屋（下宿の）に何もないことである。まだ見えるという気がした。それで再び目を閉じてみた。やはりその像はハッキリと見えてくるのだ。その像というのは、私の実家（山梨県の一農村）で、いつもは父母の寝ている八畳の部屋の一隅にかけてある私の賞状類とその周辺であった。その賞状の文さえ読むことができた。他にも何かが見えたが、意識の中には深く記されていない。像は同時刻の部屋の様子であったらしく、うす暗く、賞状類と柱以外を見極めることは不可能であった。

（一九六八年五月三十一日）

二度目の神秘体験をする。いつもそうであるように、アルバイト先のビルの屋上で午後十二時過ぎ、横になりながら日を浴びて目を閉じていた。するとその空間の中に突然全く予期なしに或る鮮明な光景が投射されてきたのである。それはあたかも静より返った湖上の月の影が集束して新たにその輪郭を明瞭にするかのように、霊の出現の如く起こったのである。

丁度カメラのファインダーか二眼レフのスクリーンからのぞく外界の光景のようで、トパーズの輝きのように密度の高い、しかも純然たる色彩を持ったものであった。光景は左手に電柱と板べイ、十字に分岐した道路などがある。どこかで見かけた場所で、その辺の光景が手に取るようにハッキリと見えるのである。

判断するに私の下宿のすぐ近くの十字路のように思われた。それほど長く続かなかったので、二、三度の確認の機会を得ただけであった。時刻は十二時半ごろで、曇り空から激しい日光がさし

たときであり、私の見た光景もまた激しい日光のため鮮烈であった。この前の体験と同様あまりにも肉眼で凝視するが如く鮮明に出現するので驚くのである。私の意識は極めて平常であった。

イメージとの相違点は、目を閉じながらもハッキリとその映像を凝視している、全く客観的な、そして霊妙な自己を強く意識する点、目を閉じて物体の面影を想像しようとするときの心的肉体的な苦労は全く伴わず、あの攻勢的な印象に支配されているといった感じ、あたかも目の中に目があって、目を閉じていながらも目を開いたまま見ているような感じがする、等々である。

たとえば目を閉じたまま空間の中にイメージを描くことは可能である。しかしこれはあくまで〝心的表象〟であって〝視覚表象〟のように具体的な印象ではない。なぜならイメージによって描かれたものは精神活動の或る意味で空虚な代弁であって、決して具体的客観的実在者ではあり得ないからである。

また像は思考や感情によって蠱らされるといったことは全く起こらず、不動であった。

（一九六八年七月十三日）

四度目の神秘体験を持つ。（三度目は七月七日午前七時に起こったが、ここにあげる程のものではないという理由で記さなかった）時刻は午後五時。見られた場所は不明であるが、像はこれまでと同様肉眼視するのと全然変わらず、中央に一本の太いハリが通っていて、それから背骨の如き細いワクの伸びている薄暗い茶カッ色の天井。（私の透視体験にはいずれも証人が存在しないので、それをあくまで求める人は私の言葉を信用しない方が賢明にちがいない。私はここでもちろん事実を書いているが、体験の際の心理的変化の描写に重点を置くことにした）

うたたねから覚醒した直後の出来事で、肉体的精神的には全く弛緩状態にあったといえる。暗い平板な空間が急に奥行きを増し、その中で小さな空間が交互に存在し、次第に色合と光とを帯び、明瞭な形態に変移していくという出現の仕方は大体共通である。ただしこれまでの心理状況には面白いものがある。私は心の奥底にほんのかすかな光にも似たためまいを感じながら、計り知れない程奥深い深奥に落下してゆくような弛緩を得るのである。（後にこの弛緩を意識的に起こして、二者間での印象伝達において相当な成果をあげたが、これは後に記すことになろう）夢の中でのあの不可視な体験にも似ていると言える。私は直感的な空想によって深く暗い海がその底に広がっているような感じを得る。私はこの瞬間的弛緩を冥想によって意識的に生み出すことができると信ずるようになってきた。努力次第ではたぶん可能であろう。

（一九六八年八月十七日）

面白い体験を持つ。昨夕は友人のN子が来る約束になっていたので私はそれを待っていた。九時過ぎても来ない。（今までこのように遅くなってから来たという前例はない）私は半ばあきらめ、レコードを一人で聴いていた。シューベルトの〝未完成〟のLPを聴き終え、バッハの〝トッカータとフーガ〟のSPをかける頃になって急に焦燥を覚え始めた。レコードが中途まで廻ったところで私は突然「今外に出るなら、すぐ近くでN子に会う！」という想念がわき起こったのである。読者は少々疑問視するだろうが、事実印象はこのように明瞭であったばかりでなく、会う場所さえハッキリと判った。その場所とは、この下宿を出て左にまがり、

十字路で右にまがってすぐ近くの中華料理店のそばである、という印象であった。

私は聴きかけのレコードの針をあげ、スイッチを切り、わざとレコードをそのままにして外に飛び出した。（わざとというのはレコードの載ったままのプレヤーは、今の私の体験談に客観的な真ぴょう性を与えるのに役立つと考えたからである。なぜならN子は私の話を聴きながら〝生々しく〟プレヤーの上の〝聴きかけ〟のレコードを見るであろうから！）

予感は全く見事に適中した。印象の告げた場所から数メートルと離れていない暗い路上にN子の姿を発見したからである。私が驚いたのはいうまでもない。同様の体験を私はこの他に記憶する限りで二度持つが、これは私によって感受された印象に確信をもって従った結果の典形である。

（一九六八年九月八日）

予知、厳密には精神感応の体験を再度得る。というのは日曜には絶対に来ないことになっているN子が来るのを的確に予知したからである。午後五時過ぎ、私用で外出することになった私は、その往復の時間内（二十分以内）に私の下宿にN子が来るという感じが強くなったので、次のような紙切れをテーブルの上に残して外に出た。「N子へ。私用のため目白へ行く」約二十分で帰宅した私は、まだ来ていないことを知って再び外出しようとした。食事のためである。しかしメモはそのままにしておいた。遅くとも食事の時間内には来るものと感ぜられたからである。私はそれが空想だなどとは思わず、ただちに階下に降りたのだが、なんとそこで微笑みながら玄関を入って来た彼女に出合ったのである。

N子の話では、午後になるまでここに来るつもりはなかったということであり、しかも駅を下車してここに来る途中で、その途上にある友人宅に十分間立ち寄ったという話であるから、私の予知した彼女の来るはずであった時刻と実際の時刻との計算上の誤差は約五分ないし八分の内である。（しかし真に厳密な予知は一分の誤差さえあってはならない。次の体験で私は誤差が一分もない予知を得ることになる）

（一九六八年十月十九日）

私は知人の帰宅の時間を三十秒の狂いもなく（と私は信ずる。信ずるというのは、その時の時計類は〝秒〟まで示さなかったからである）ピタリと適中させた。知人とはN子の女性の友人で、その日の午後N子と共に私は彼女の知人なるT子のアパートを訪れたが留守であった。私達は少しなら待とうということで部屋に入ったのであるが、そこで私はN子に「T子の帰宅の時間をピタリと当ててみようか！」と自信をもって問いかけ、ほんの数秒冥想した。丁度時計の針が或る方向（時刻）に吸い寄せられて文字を示すように、私は或る方向に深くしかも重い印象を受けた。こういう印象はトランプゲームをしているとき、だれが勝利をおさめるかとか、だれにジョーカーが渡り、だれが有意義なカードを手にしたとかいうことに関してよく持つのであり、そんなとき、私は或る特定な方向に引き寄せられるような感じを持つので、しばしば勝利者等を予言し、友人を少々驚かすのである。

さて今日の場合、即座に〝十三分後！〟という強い印象に引き寄せられる感じを持ったので、私はN子に言った。「彼女はすぐ帰って来る。十三分後にね！」と。時計を見た。時刻は八時四十

七分である。さて十三分後の九時きっかりT子はドアーの内に現われ、驚嘆したN子と、得意そうでしかも笑っている私を見てまゆをひそめたのであった。（この他にも彼女の帰宅時間等を何度か予知したことがあるが、ほとんどの場合N子を驚かした）

（一九六八年八月三十一日）

午後N子と簡単な想念伝達の実験をする。彼女に信号機の赤・黄・緑を一回ごとに一色ずつ心中に明瞭に描いてもらい、私はそれの受信者となったのである。以下はその成績表と備考である。

	発信	受信	評価
1	緑	緑	○
2	赤	赤	○
3	赤	赤	○
4	赤	赤	○
5	緑	緑	○
6	黄	黄	○
7	緑	赤	×
8	赤	赤	○
9	黄	緑	×
10	緑	緑	○
11	緑	緑	○
12	緑	緑	○

これは正式な二者間の実験としては最初のものである。受信に際して私は透視実験において経験するような〝透明な空間〟を冥想するようにした。なぜならこの透明で暗黒の空間に落下してゆくような気分になるほど精神の高揚を得ることによって、その中に心的表象的な〝色彩〟を彼女の色の発信と同時に見るはずであると予見したからである。この精神統一はただちに得られ、実験は始まった。あまりにもつじつまが合っていると思われるかもしれないが、事実、私は気分のよいまぶたの裏の深い空間より、うすぼんやりと出現してくる緑色の〝色点〟を発見したのである。予想は見事に的中したし、また的中しなければならなかった。こうして第一回目の実験はその十二回を終了したのである。

個々の例に関して詳述しよう。（読者は無理してこの記録を読むことはない）

（三回目）N子が赤にしようか黄にしようかと迷っているのがハッキリ感じられた。というのは空間の中で赤と黄の色点が交互しているのが見えたからである。私はすかさず「今赤にしようか黄にしようか迷っているね。だけど—結局たった今赤にしたところだ！」と言ったのである。もちろんN子はそれを確認した。

（四回目）またも赤であることがわかったので少々愉快であった。というのは私の意表をつこうとして赤を連続三回浮かべている彼女が面白く思えたからである。そこで私は言った。「ノコちゃん（N子の愛称）て意地が悪いね。また赤をうかべるなんて」彼女は驚きながら苦笑した。

（五回目）迷っているのが明瞭に感ぜられた。赤の色ハンの上に緑の色点が重なって見えているからである。「赤にしようか、緑にしようか、またも迷っているね」と私は言い、その際中に緑のみがハッキリして赤が消え去ったので「赤！」と答えた。

（六回目）何の徴候も見出せず、空間が白くにごっているので、前にもましてよほど迷っているのが感ぜられた。やがてそれは次第に黄色に変色してくるように思われたので、私は「赤にしようか緑にしようかと迷っているけれども、たった今黄色に決定したね」と答えた。彼女はそのすべてを肯定した。

（八回目）たぶんこのほんのちょっと以前から或る光景がまぶたの裏に表象しようとしていたのであって、五度目の透視体験の得られそうな状態でもあった。その中に浮かんだのは不鮮明な透明な窓ガラスであって、しばらくして突然その窓ガラス全体が赤色に変化したので、「赤！　この赤を浮かべたのは、今オレが赤と言ったのと全く同じ瞬間だろう！」と問いただしたところ、彼女

はそれを肯定したものであった。

（十回目）目を閉じた瞬間、非常に美しい緑が浮かんだので、「今度は随分ハッキリ浮かべたんだね。すごくキレイな濃い緑だね」と断言。これはまさにその通りであった。

（十二回目）色点は出現せず、ただ不透明な白っぽい緑で空間が満たされているので、「緑！」と答えたところ、彼女はそれを肯定し、その後につけ加えた。「今度のはホワイトがかっていたのよ」

さて読者は、感受される色の印象が、濃いだの、ホワイトがかっているだのと、微細な面にまで渡っているので、不信の念を一層濃くされたことと思うが、更にずっと後の実験で、私はあらゆる色彩（黒・白・赤・緑・紫・茶・黄・青・金色・汚ない緑・薄いブルーなど）実際私はこのように答え、それはいずれも適中した）を言い当てることができるようになった。しかしこれは記録しなかったが、実験はそれを経てもっと直接的な印象伝達の段階に入った。たとえば草原とか太陽とか、いずれも発信者の自由のまま、何の制約もなしに・・・」

（一九六八年九月十四日）

二度目の印象伝達の実験をN子と行なう。記録表は省略するが、ここでは「五回連続して全部あてる！」と断言して全部適中したものである。この際N子はわざと雑念を送るとか、色彩カードを二枚双方を見ながら送信するとかいった中で行なわれ、彼女の言うところでは「二回適中すれば立派」というものであった。

（九月二十六日には、五種類のESPカード一枚ずつと赤・青の二色、合計七枚のカードを使用してN子とのあいだで実験を行なったが、十四回のうち八回の適中回数を得た。もちろん偶然適中回数を上廻っている）

（一九六八年十月八日）

記録あるものとして四度目の実験を行なう。発信者のN子には白・黒・赤・緑・青の五色を思念してもらい、方法はこれまでと同様。

これは驚くべき成績を得ることができた。白に関してはハンカチを使用し、思念をしやすくした。また緑に関してはESPカード入れの自作の箱を使用し、これには紫色の地色に小さい長方形の緑色の図案が施されてあり、それは黒いフチで囲まれていた。他はカード。以下はその成績表と備考である。

	発	受	評
1	赤	赤	○
2	緑	緑	○
3	青	青	○
4	白	白	○
5	青	緑	×
6	赤	赤	○
7	赤	赤	○
8	白	青	×
9	黒	黒	○
10	青	青	○
11	紫	紫	○
12	赤	赤	○
13	黒	黒	○
14	青	黒	×
15	赤	緑	×

（四回目）白にはハンカチを使用したと前述したが、このとき私はハンカチの像そのものを目を閉じた暗闇の中に見出したのである。

（七回目）まぶたの裏側の暗闇の右側にガラス窓がぼんやりと映り、それが薄赤く色づいているのを見た。

（十一回目）驚くべき鮮明な色彩を見た。まぶたの内側左よりに縦に細い黒スジの通った目のさめるほど美しい紫色が長方形の面積を伴って出現したのである。私は感嘆の言葉を発した。「キレ

イだなあ！」紫――それは明らかに紫であったが、これは約束になっていない色である。私は黒スジの通った紫がどうして発信されたのか全く想像できなかったが、しばらくして彼女の手中にある前述のＥＳＰカード入りの小箱を発見して驚嘆したのである。「この色だ！　まさしくこの紫だ！」と。彼女はただあきれているだけであった。

（一九六八年十一月二日）

帰郷した際の妹との印象伝達実験を記す。実験の部屋には弟もおり、合計三人が同時に存在し、しかも弟は時々勝手な色彩を思念したことを後に告白した。兄弟というものは特に精神的傾向が類似しているという理由からこの実験でも自信はあった。使用した色彩は青・緑・赤・黄の四色で、カードは使用せず、品物の色彩を利用した。

	発	受	評
1	青	青	○
2	緑	赤	×
3	青	緑	×
4	黄	黄	○
5	緑	緑	○
6	赤	赤	○
7	緑	緑	○
8	黄	黄	○
9	青	緑	×
10	赤	赤	○

（四回目）「赤にするか黄にするかと迷っているが、たった今黄にした！」と私が言うと、彼女は驚きをオーバーに表現し、それを肯定した。

（七回目）突然、まぶたの裏に長方形の非常に鮮明な色彩が出現したので、驚いてそれに注視し、その色が緑の分野に入るか青の分野に入るか考えていた。それは完全に一つの明瞭な色彩であるにもかかわらず、青でも緑でもなく、いわばその混合色のようであったからである。その旨を伝えると、妹のＵ子は私が頭からかむっていたフトンのデザインを指し示した。まさにそれは長方形にデザインされた青と緑の混合色であったのである。

肉眼視したあの明瞭な色彩と、イメージに浮かぶあの薄ぼんやりした色彩の相違を考えてみるなら、如何に受信者が肉眼視的な心象を得て驚くかは察することができよう。

また注意すべき点は、印象が感触的な印象を帯びてくるようになった点である。たとえば肌をくすぐるような水流の感じとか、ゴミが身体にベッタリとついたような感じとか、抜けるように透明であるとか、暖かい、冷たい、あるいは押されたような感じとかいったものである。

（一九六八年十一月六日）

Ｎ子との高度のテレパシーの実験を行なう。最初は何の制限もなく自由に色彩を思念してもらい、それを適中させるというものであった。私が言い当てた色には次のようなものがある。ピンク、薄いブルー、にごった濃い緑、紫、アズキ色、赤、白、緑、茶色、カーキ色、オレンジ、草色等、実にさまざまである。なぜそんなところまで判るのかと問われても返答のしようがない。まさに私には判るのである。

さてこれはあまりにも私が適中させるので憤然とした彼女の願望により更に困難な実験に変更されたが、これはそれ以上に彼女を驚嘆させ憤激させることとなってしまった。その実験とは私の万年筆・手帳・時計、それにＮ子の赤バンドの時計の四種類の品物を彼女の自由において細工させ、その様子（たとえば品物の置

かれた位置とか、それが置かれている状態といったもの）を適中させようというものであった。

私は頭から深々と毛布と厚ブトンをかむり、目を閉じた。もちろん一点の光も入ってこないし、それどころか光は有害である。以下はその記録と備考。

	発信者の行為	受信者の解答
1	腕時計（N子の物）をハメル	腕時計（N子の物）をハメル
2	腕時計（N子の物）を私の頭の辺に接近させる（但し触れない）	腕時計（N子の物）を私に接近させる
3	手帳を開いて私の体と平行に向けて立てる	手帳がこちらを向いて開いて立っている
4	手帳の表紙にN子の腕時計と私の万年筆のキャップを載せる	手帳の上に万年筆のキャップが載っている
5	手帳に付属している細ヒモを外に出す	手帳のヒモが外に出ている
6	万年筆のキャップのみをそのクリップで手帳の紙にはさむ	万年筆のキャップの中に手帳の何かが入っている。キャップと手帳がドッキングしているという感じ。
7	二個の時計のバンドを鎖状につなぎ合わせる	二個の時計がリング状につながっている
8	手帳を半開きにして立て、その上にN子の時計を表面を上にして載せる	手帳を半開きにして立て、その上に赤いバンドの時計が表面を上に載っている

「絶対に当たらないようにするわ！」と憤然とした面持で彼女は何度も断言したが、結局彼女のあきらめによって実験は終了した。（私は実験の延長を望んだが、彼女は拒否した。）

確かに私の解答は驚異的であり、不信を買うものであるが、この記録はN子の見ているもとで書かれたものであるし、記録そのものに疑惑の余地はない。残された可能性は、私が〝のぞき見〟をしたかもしれないという点である。

印象の殆どは直感的に即時に得られたが、複雑なものは印象の解読にかなりの注意力と時間とを要した。

たとえば二回目の実験で腕時計が接近したとき、細長い光の帯が私に向かって暗闇の彼方から接近してくるのを見た。そのときすでにそれが時計であることが私には判っており、フトンの中で私はこう言ったのである。「今手を伸ばしてオレに近づけたね！」

またキャップが万年筆からはずされたとき、やはり私は闇の中で一個の長方形の光体が分離して二つになり、その二つがほぼ並列になった印象を受けている。私は宇宙空間中のロケットとカプセルとがランデヴーする模様を想像しながらそれに注視していたのである。

次は東京に下宿してからの友人であるK君とのテレパシーの実験で、やはり私が受信者となり、赤・黄・緑・青の色と同時に自由な映像を思念してもらい、それを適中させるものであった。彼との実験はこれが初回である。

K君の発信	受信者の解答

1	赤	リンゴ	赤	太陽
2	緑	野原	緑	野原
3	黄	マカロニ	黄	パイプ（管の意）
4	赤	電燈	緑	太陽または電燈
5	赤	カーディガン	緑	点滅するランプ
6	緑	鳥、湖	緑	山、海
7	緑	細長い帯状の草。カキの葉の形の葉を持つ木の枝。それから水滴がしたたり落ちる。（それ以外にも思念したと思われる）	緑	細長い帯状の何か。ニジのような形。カキの葉の形の葉の木の枝。その下に水たまり。コケむした岩。
8	黄	イチョウの木	青	左手、縦に帯状のもの。地平線

（一九六八年十一月七日）

前日のK君との実験をN子とくり返す。使用した色彩は赤、緑、青、黄の四色。思念する映像は自由。実験の結果、色彩の適中は十六回中十四回である。その中には約束以外の色（白色）が入っている。以下はその全記録。

		発信者の思念		受信者の解答
1	赤	平安神宮の朱塗りの赤。神秘な感じ。	赤	花、炎、またはガストーブ。不気味な感じ。
2	緑	キャベツ	緑	帯、山、木の枝
3	黄	ゆで卵の黄味	青	広く平ら。太陽光線

4	緑	片方にあけられているこの部屋のカーテン	緑	帯状に長い山脈または草の葉
5	青	海	黄	深い感じ。湖
6	赤	カーネーション	赤	丸い感じ。キャンプファイヤー
7	緑	広々とした芝生	緑	広い感じ。森か山
8	青	ハンガー	青	鳥
9	黄	小さなミカン	黄	オレンジの夏ミカン
10	赤	赤外線コタツ	赤	妙に暑い。暖房器具
11	赤	もみじ	赤	外にあるもの。花
12	赤	夕焼	赤	夕焼
13	青	魚	青	海。しずくのような形の宝石
14	白	シャンデリア	白	シャンデリア
15	赤	花火	赤	火に関係があり。漢字にすると〝火〟という字がつく
16	青	ききょう	青	風景。水

十回目に規則を破ってN子は白を思念して私の解答を待ったが、その私の解答に茫然としたという。私には色が白であり像がシャンデリアであること（もっともこれらは一体の印象であったが）が即時に判ったのでこのように言ったのである。赤外線コタツの思念に関して実際私は第一印象として同じものを得ていたのであるが、それを避けたところ好結果を得ることはできなかった。

テレパシーの特異な体験

いぶきのり子

昭和四十年一月十日の夕方、公用にて自分の車を運転帰宅途中、交差点で信号無視の乗用車に時速四十キロのスピードで追突され、ケイ部及び頭部を強打しました。ショックのため一時的に意識不明となりましたが、すぐに意識を回復し、病院で応急手当を受けて帰宅しました。事故直後よりケイ部が紫色に膨脹し、喉頭部の方にも影響をきたし、軽度の呼吸困難がありました。後頭部打撲のため頭痛がし、頭部はとう痛のため全然動かすこともできず、固形物は二週間程ノドを通らぬ状態でした。病名はムチ打ち損症とのことで、レントゲン検査では異常は認められないということでした。しかしムチ打ち症特有の頭痛がひどく、手のしびれも取れず、病院では治療できないため、三月上旬に入院致しました。奇妙な現象が起きたのは入院後三日程経過した夜半でした。頭痛のため不眠症となり、眠れぬままぼんやり夜の闇を見つめていますと、後頭部がまるで無線通信のようにピーピーいうので、頭痛のためだろうと思い、気にしませんでしたが、そのうちラジオの音楽のメロディーや話声のようなものまでビーンと響いてくる感じで、だれかトランジスターラジオでも聴いている人がいるのだろうと思い、頭の中の名状しがたいものが次第に変に思われて、一体どうしたのだろうと、なおもそれに心をうばわれていると、隣の詰所の看護婦の話声が聴こえないのに、その想念が印象となってくるのです。そして善悪のいずれもその人たちのもつ波動が全部感受できるのです。まるで他人の心中が見えるような感じがして、これは頭がおかしくなったのかとあまりに不思議な現象に薄気味悪くなりました。

その頃は精神波動や想念等について何も知らず、この現象については恐怖心や不安感の方が強く、少し眠れば朝には治るだろうと極力気を落ちつけて眠る努力をしましたが、ますます目がさえて、そのうち異様な雰囲気さえ私のベッドのまわりからくるのに気づきました。それは生ある人の想念ではなく、死者の残した想念が波動となって伝わってきたのでした。

まんじりともせず一夜が明けて、その朝から色々の想念がのべつまくなしに私の心を悩ますようになりました。室内や廊下を通る人々、看護医師、患者たちのあらゆる想念や波動が感じられるのですからたまったものではありません。私の頭の中の一部が変化を起こし、念波をとらえるようになってしまったのです。まるで無線通信の受信機と化してしまい、感覚は異常な程鋭敏になり、ついにはそれらの電磁波が体に突きさしてくるかのような痛みさえ覚えるほどでした。

私は強いショックを受けて極度に緊張し、精神的に不安になり、この状態が十日も続きました。憎悪、非難、不平、不満、怨恨、嫉妬、猜疑、欺瞞、頽廃等々、空間に満ちたもろもろの想念がみな一時にワーッと押し寄せてくる感じで、気が狂ってしまうのではないかと思う程で、ノイローゼ気味になってしまいました。だれかが私の前に立つとその人の性格または深くかくされた心の内奥の魂の響きというか魂の叫びとでもいったらよいのか、表現の

しようがありませんが、真実の心の声が善悪ともみな判ってしまうのです。この地球上の空間に満ちた人間の心の何と醜悪で汚ないのだろうと思えば悲しくて泣けて仕方がありませんでした。あらゆる想念のうち誠実で美しい平和的想念は百パーセントのなかから〇、一パーセントくらいしかこないのです。もっとも病院は病人ばかりなのでよけいに病的な悪い想念を感受したのかもしれません。

今はこの体験がテレパシーだと知りましたが、そのとき知っていればこれ程苦しまなかったでしょう。テレパシーを深く研究し、自己開発のため訓練していればこの才能をのばし得たかもしれなかったのにと、一寸残念な気もしますが、あのような苦しい体験はもう沢山です。私はこの能力のことについてはだれにも言わない方がよいという印象があって絶対にしゃべりませんでした。これ程苦しい体験をしたのは私の想念が低級だったためそのような低級な想念ばかり引き寄せたのだと思います。とにかく人の想念が皆判り、恐いくらいで、人に会うのも憂うつでいやになり、ノイローゼになってしまったほどです。

人の心中が読めるというよりも、むしろその人間の気づかない魂の叫びとして発せられる電磁波をとらえてしまうのです。体験をした者以外の人には到抵理解していただけないかもしれません。表面的な意識でなく、内奥にかくされた潜在意識をとらえていたのです。この現象が約一年近く続きましたが、ムチ打ち損症が治癒すると共に徐々にこの能力も消失しました。人の心というものは現象の世界の常識を超えた不思議な働きをするものだとつくづく考えさせられました。オランダのペーテル・フルコス氏の体験を後に著書で知りましたが、フルコス氏の体験や苦しみが実感として理解できました。

その後四十年十二月十日に一生忘れることのできない不思議な奇妙な体験を再び致しました。夜十時すぎだったと思います。まだ軽度の不眠症が続き、眠られぬままに数をかぞえていたのですが（事故前は不眠等なく、眠りすぎて困る位でした）、緊張するから眠れないのだと思い、冥想をしておりました所、急に外から窓のすき間を通って眼のくらむような閃光が私の頭上を走り、「パチッ」と音がすると同時に聴きなれない音楽がかすかに聴こえて、全身が電気に触れたのでもない何かビリビリッと痛いような感じを受けました。どう表現すればよいか適切な言葉がありませんが（雷鳴も稲妻も発生していない天気のよい晩でした）、丁度撮影の照明用フラッシュをたいたような眼のくらむ光でした。窓の外には星空があるだけで光の入ってきそうな状態ではありません。私はびっくりして起き上がり、完全に眼がさえてしまいました。そのあと宇宙的な性質を帯びた印象が聴きなれない音楽と共に入ってきました。音楽はすぐやみましたが、それは何かすばらしい、魂が高揚するような気分なのです。そして宇宙的印象を帯びた想念が次々と入ってくるのです。私の疑問を次々に解いてくれました。そのような想念が昼夜くるのです。閃光が強すぎて心臓部が痛い位に感じられるのでもう少し弱くしてくれるよう想念を送りますと、次の日から全然弱くしてくれて、ついには慣れてしまいました。最初の想念をこちらへ送る合図として閃光とかすかなすてきな音楽が聴こえてくることがわかりましたので、四、五日後閃光がなくても印象を感受できるようになりました。

前生について、人生の正しい生き方、死に関する問題、また利己出義や搾取、戦争等の罪悪について、平和と真の愛について等々次々に知らされました。私は神とは人間のでっちあげた創造物で、そんなものは作り事だと思っていました（もちろん無神論者でした）ののでそのような想念を送ると、それは間違いで宇宙の創造主はいるのだということをはっきり知らされました。前生についても死んだら灰になり土に帰るだけで、魂だの前生だのは偽りだと信じていたので自分の前生について知らされたときは驚天動地の思いでした。生まれかわりなどついぞ思ってもみなかったのです。何か特異な現象をすぐに心霊的なものと結びつける人達は認識不足で間違った観念をもっている事、まだ私達に知られていない科学があり、宇宙や自然のすべては創造主により科学的に支配されている事、まだ私達はそれを理解していないのだという事等を知りました。私は大いに驚き、どうしてこのような奇妙な現象を感受したのかと考えてみましたが、今もって不可解な体験です。その後多少の予知能力もありましたが、自然になくなりました。この貴重な体験は私が事故にあうことによって人生の転機とも言えるチャンスを創造主が与えて下さったのだと思って心から感謝しております。

その後アダムスキー氏の著書を読む機会を得て、私の感受した宇宙意識の教えとぴったりなので驚いてしまいました。色々試行錯誤をくり返しながら今日まですごしてまいりましたが、以前よりは多少進歩したように感じられます。

偉大なアダムスキー氏がなくなられた事はまことに残念ですが、ア氏の遺志をついで活動なさる方々が世界の夜明けをもたらす日も必ずくると思います。地球上の人類は遅々としてながらも眼覚めつつあります。今はその過渡期で色々と困難も予想されますが、苦難を克服してねばり強い力をたくわえる時です。皆さん、日常生活が苦しみや困難にみちたものであっても勇気を出して頑張りましょう！

つたない手記ですがここに私の真実の特異な体験を述べさせていただきました。

編者注＝閃光と共に美しい音楽がかすかに響いて宇宙の彼方から想念が伝わってくるというのはなかなか詩的な現象で、ブラジルあたりで発生した事件みたいだが、現実に日本で起こった体験であることは注目に価する。UFOに関係があると思われるが詳細については四月上旬に本人から直接聴取する予定である。筆者は益田市の付近の町の出身で、一昨年八月に日本GAPに入会された。職場では献身的な活動によって聖女と讃えられている。なおペーテル・フルコスの不思議な体験については左記の著書が出ている

ペーテル・フルコス「未知の世界」　四八〇円
東京都千代田区神田小川町二ー八、筑摩書房

毎十分想念観察法

久保田八郎

ジョージ・アダムスキーのあらゆる記述のなかで私にとって最も重要な部分の一つは、〝テレパシー〟中で述べている精神台帳を応用した想念観察法である。これを知るに及んで多数の宗教や哲学を遍歴して満たされなかった理由がわかったような気がした。つまり大方の既成宗教や哲学は教義や理論の解釈に終始する知的遊戯にすぎないのであって、自分を実際に変化させる原動力としては縁遠いものであることに気づいたのである。自分自身や自己の環境、運命等を変化させるものでなければ何にもならない。「ヘーゲルが何だ。何でもありゃあしないじゃないか」と戦後まもない頃に坂口安吾が書いていたのを思い出すが、これは個人の魂や精神の飛躍的高揚をいわゆる哲学に求めても無益なことを端的に表現している。もちろんヘーゲルは後世に大きな影響を及ぼしたし、或る意味では個人の環境に変化をもたらしたかもしれないが、大学の単位取得用の学問として役立ってもここで述べようとする事柄とは直接の関係はない。

学問上の哲学は別として、実践的な宗教団体はそれぞれ独自な行法や祈りなどを行なっており、それなりに効果があるようにも思われるが、多分に集団催眠的要素を帯びていることは、多人数が一堂に会して行じるときの精神の高揚状態も、一度家庭に帰ればたちまち雲散霧消して再び現実の低級な想念の大海におぼれるのが普通であるのをみてもわかる。宗教団体によっては毎日三十分ないし一時間くらいの行法や思念を行なわしめるのもあるが、二十四時間中たった三十分や一時間かそこらの行法では殆ど効果はない。実行中にいくら精神を高揚させても、すんでからまた元の状態に返るのは無意味である。われわれが求めている自己高揚のためには、四六時中絶えず自己の想念を観察してそれをかたっぱしから記録してゆく。そしてあとからそれを調べてみる。悪しき想念を駆逐して善き想念（宇宙的想念）に切り換える。こうして意識的に高度な想念を保つように自分を客観視しながら心を純化させてゆくのである。これの具体的方法としては善き想念の〝反覆思念〟を必要とするが、物事の遂行にはその経過を文字で記録することが大切で、記録の分析考察を行なってこそより大きな進歩がある。そこで精神台帳なるものが少なくとも私には絶対に必要となるのである。

私の想念観察法については五、六年前にニューズレターで紹介したことがあるが、ここであらためてお伝えしよう。ただし必ずこの方法をとることが必要であるというわけのものではなく、記録などしなくても堀川とき氏の如く〝テレパシー〟を読んだだけで家庭に大きな変化が起こった例もあるが、これは生来魂の高い人の例であろう。私のような低級な人間にはあれこれと方法を講ずる必要がある。

アダムスキーは「わき起こる想念をかたっぱしからノートに記録し、善・悪の両想念を左右のページに別々に記録して、一日の終りに集計せよ」と述べている。これは常時携帯の自由日記みたいなもので、私も当初この方法を試みたけれども、いちいち文章

で書きつけるのはいかにも繁雑であり、ルースになりがちなので、次の方法にあらためた。

まずポケット用の手帳を一冊用意する。横ケイの引いてあるものがよい。一つの行間を時間にして十分間ということにし、時刻の数字を次の図のように記入しておく。（これは八時から九時五十分までを示している）

8 0
10
20
30
40
50
9 0
10
20
30
40
50

左頁は宇宙的な善き想念、右頁は利己的な悪しき想念の欄とし、朝起床時より夜の就床時までひんぱんに時計を見ながら十分ごとに時刻の該当欄へ想念の内容を次々に記入してゆくのである。ただしあまり詳細に書く余裕は大体にないから、なるべく簡潔な表現を用いる。たとえば「M氏に対する憎悪感少々」「宇宙の広大さを思う」「自他一体感」「不快な分裂感大なり」「神の子の感じ」「Y嬢に対する肉欲感」「ヤケになり酒飲みたし」「再び神人合一感」「友人Z君に対する限りなき感謝」等々。とにかくわき起こる想念を全く客観視して公正に次々と記入してゆく。そして就寝の際にプラスの感情とマイナスの感情を集計する。最初はマイナスの想念があまりに多いのにうんざりするが、記録するのが目的ではなく想念を高めるのが目的であるから、努力して善き想念をふやすようにすれば次第にプラス面が大となってくる。台帳の集計はいわば計器の指針のようなものにすぎない。

これは心理学でいう内観法と同じだと思われるかもしれないが、似て非なるものである。内観法は単に想念の動きを観察するだけだが、これは観察・記録を手段として精神の高揚を図る方法である。多忙なのにいちいち手帳を取り出して記録するヒマはないという人もあるだろう。仕事の性質によってはたしかに実行が容易でない場合もある。そのときは文字のかわりに特殊な記号を考案して手早く記入してもよいし、十分間を延長して二十分ごと、または三十分ごとの記入にしてもよい。方法は各自で考えればよいのである。自分の想念を自分で観察するのは不可能だという人もあるだろうが、そんなことはない。十分間ごとの〝記憶〟の記入なのであるから可能である。

記録などしなくても確固たる信念をもって生きればよい、というのは私にはどうも抽象的であって目標が定めがたい。積極的に信念をもつことは重要だが、信念といっても結局想念であるから問題はその持続性にある。「人間は神の子なのだ」とか「万物は一体である」という茫洋とした概念だけで時をすごしても殆ど効果はあがらない。自分が変化しないのだ。自分を変化させるということは肉体を健康にし、自己の環境や運命を好転させて、生活を輝かしいものにすることを意味する。それも一種の利己主義ではないかという人もあろうが、これはエゴではない。自己を輝かしい存在にすることは他人をも輝かしくすることになるからだ。

自己を変化させるのに最有力な原動力となるものは強烈な反覆思念であって、このことは多くの実例から帰納的に推理できるのである。詳細は省略するが、強烈な思念には何か神秘的な強大な力が含まれていて、難病の治癒ばかりでなく運命の好転等が不思議に実現するのであって、これもテレパシーの作用によると思わ

れるが、具体的な事柄に関しては本号の「思念と奇蹟」を読まれたい。

信念（強烈な反覆思念）の絶大な効用についてはイエスという人が説いているのだが、大昔のことであるので現代人はこれを神話化してしまい、あまり信用しなくなってしまったけれど、テレパシー研究が科学的に行なわれるようになった今日、重要事として見直す必要がある。数年前イタリアの山中で巨大なダムが決壊して村が全滅するという大惨事が発生したが、動物たちは事前にこのことを予知していて、一斉に逃げ去ったが、人間たちは奇妙な目付でそれを見ているだけだった。河中に転落する運命にあるバスに乗るはずのところ、何かのはずみで乗らなかったために助かったという例なども、人によっては解釈が異なるだろうが、想念と運命との重要な関係があると考えてまず間違いないだろう。

さてその反覆思念だが、これもやはり当初は記録する方がよいと思う。なぜなら人間の習慣的想念はおそろしく体内に根を張っていて、ちょっと無意識になるとたちまち低劣な想念で縛りつけてしまうからだ。「人生はアホらしいものだ」「しょせん年をとって死ぬだけだ」というような習慣的悪想念のトリコになって生きている人が殆どであるこの世界の混濁した意識界のさなかにあって、自己を変化させるほどの強力な思念を続行するのは容易なことではない。しかもこの実行力においては個人の能力差、意欲差等があるので、慎重に開始するにはやはり反覆思念の度合や持続時間等を記録する必要があり、記録されてこそそれが事実として確認され、確認されるがゆえに前進の証拠となるのである。

前述の如く強烈な思念が本人の肉体を変えるのみならず環境や運命を一変させ、周囲に大なる影響を及ぼすことは昔から知られた事実だが、科学的には未解決である。しかし近来このことに注目している学者もいる。精神身体医学の発達はそのあらわれである。ブリストルという人の書いた「信念の魔術」という書物は有名だが、D・カスター著「精神力—その偉大な力」（邦訳版がダイヤモンド社から出ている）という本もすばらしい名著で、その中の第十九章「積極的信念への段階」において自分が望む物をまず紙に書いて、その言葉と、応答への信念を述べた言葉を、一日に二、三回読みかえせと述べているが、これも反覆することにほかならない。この書にも多くの実例があげてあるが、それに似たような現象は日本にも起こっている。迷子になって行方不明になった幼児を見つけるのに、プラスの感情に加えて「必ず見つかる」という強い思念をくり返した結果、不思議に一人で帰って来た例や、ガンで死の手前までいった重症患者が反覆思念によって奇蹟的に数日のうちに治った例等は「思念と奇蹟」の筆者巽直道先生のグループにはザラにある。難病治癒の場合は肉体細胞に対してテレパシックな意志伝達が行なわれた結果であると考えられるが、これは細胞が情報を伝達する生ける実体であることが近代の科学で判明しかけてきたという事実からもうなずけることである。

さて、かつて毎十分想念観察法を約三ヵ月続けた私は、自分が驚くほど純化され精神が高揚しているのに気づいて驚喜した。三ヵ月前にくらべて見違えるほど進歩しているのだ。外界のすべてが宇宙の意識の現われであり、自身が宇宙の中に溶け込んで今やまさに永遠の生命を獲得したような感じがする。そして不思議に必要な物がどこからともなく与えられたりする。「これでよし！」

と思った。自分の魂は無限の力の場のなかに座を占めた。もう何物にもゆらぐことはない。自分を傷つける物はない、と心からの安泰感にひたることができた。そして観察法を中止してしまったのである。すると次第に神の子の謙虚さは慢心に変じた。周囲の人々が惰眠をむさぼるバカに見えてくる。こうなると無信仰な一般人よりまだ始末がわるい。こうして再び元の状態に逆もどりしてしまった。

その後もまた何度か想念観察を行なったりやめたりの連続であるが、つまるところは〝意志〟にかかっているように思う。タバコをやめようとする意志の力と同じである。この〝意志〟こそ全く本人のものであって、他人は何もしてくれない。意志をもつことなしに急にタバコがやめられないのと同様に、個人の精神的高揚はぼんやりと無意識に暮らしているうちに或る日突然実現するという性質のものではなく、積極的に意志をもつことと反覆思念とによって漸次に実現してくるものである。ひどく不快な体験をして意気消沈した場合、マイナスの感情を払拭して明るく輝かしいプラスの感情に切り換えるには、ただちに積極的にその方面にむかって強烈な思念を起こす必要がある。これを続けているうちにやがて自分が宇宙に溶け込んで、無限の生命に満ちた神の国に生きているという実感がわき起こってくる瞬間が必ずある。この瞬間がやってくるまで思念を続けるのである。〝忘却〟という恩寵の法則によって不快感が消滅することもあるが、これには時日を要するし、第一完全に消滅しない。根本的には自分自身の意志の力によってマイナスの感情をプラスに転換させることが重要である。

毎十分想念観察法を数時間続けたらアタマにきたという人もあるが、それは〝慣れ〟の問題であると思う。大体人間には自省的な宗教的感性の高い人とそうでない人とがあるが、生来求道的な性質の人でも、求道的ではないが職業の性質上常に手帳を携帯してメモをする習慣のある人のように〝記入慣れ〟していなければ最初は困難だろう。しかし根本的には想念観察の必要性に対する認識の度合にかかっているのであって、このことはまた別問題となってくる。つまり、そんなことまでする必要はないと思っている人はこの場合批判の対象にはならないのであって、それは音楽の美を認識する力に欠けている人を非難できないのと同様である。ただ人間の精神には強大な力が秘められているらしいことは多数の実例から容易に肯定できることで、その事実に気づいてそれを応用する方が、そうしないで劣敗の人生をすごすよりも賢明であるということも、音楽の美に気づかないで索漠たる生活をすごすよりも、それに気づいて豊かな感性を養う方がよいというのと同様である。

詳細はアダムスキーの〝テレパシー〟を読まれたい。〝生命の科学〟にも反覆思念の重要性が説いてある。具体例については巽先生の解説で示されるだろうし、直接先生に照会されてもよい。

〝テレパシー〟を読んで救われた

堀川　とき

私は五十六才の主婦ですが、結婚して以来今まで三十年以上も精神的に解決できずに苦労してまいりました。私は割合に楽天家で、人には苦労しているように見えないらしいです。学歴は高等科中退で、別に教養がないので色々と悩むのかと思っておりました。

主人は六十一才で小学卒で職人です。そして競馬やパチンコ、バクチやお酒が好きで、一ヵ月おきぐらいに給料を持ってきていました。今まで主人の悪い所は親せきにもだれにも話さずにおり、私と子供三人（長男三十四才・長女栄子二十五才・次男十九才）で色々考えても解決できずに困っていましたが、主人の悪い点を他人に見せないようにみんなで自分の事のように隠してきました。

主人は昭和十九年に兵隊にゆき、二十三年に帰ってきました。それから私は毎晩のようにうなされて眠れない日が二十年近く続きました。その間目がまわって船に乗っているような気持で毎日を過ごし、一年に何回も立つ事もできずに半年近く床につくようになってしまいました。

主人は陳列ケースの職人で、東京の主人の弟の家を借りて働いていました。その頃私達は埼玉県に住んでおりました。それで主人は朝早くから出かけて夜中でなければ帰ってきませんでしたが、それも仕事か遊びか私には全然わかりませんでした。主人とは簡単に見合した程度で、働き者だということで、あまり性格もわからずに結婚してしまいました。結婚後も家に帰ってくると新聞などを見ていて、話し合いもあまりしなかったので、主人の性格はわかりませんでした。私は主人が兵隊に行っている間、二人の小さかった子供をかかえて田舎に小さいながら家を建てて、主人が戦争から帰ってくるのを待っていました。その頃はよく眠れるし、疲れもあまり感じず、ただ毎日を一生懸命に働いていましたので何も感じませんでした。ところが主人が帰ってきてから親しい人の所へ行くにもドキドキして行けず、自分が情ない、いくじなしのように思えて、ビクビクするようになってしまいました。

長男は主人の弟の家で商人として働いていましたが、とてもよく働くし、はっきりしていて素直だとよくほめられました。

主人と共に自家営業するために十二年前に東京へ引越してから主人と一しょに一生懸命まじめに働きましたが、ビクビクして口も重くなってしまい、自分からこれをやるという意志がなく、決断力が乏しくなってしまいました。

主人の仕事は陳列ケースの下職の方ですが、長男はケースの商人の方に七年も年期を入れました。主人と十二年前から下職の仕事を一しょにやるようになりました。

しかし長男は商人の方が好きなので、二年前に主人とは別に店を出すようにしたのです。今まで色々な計算や見積りその他をスムーズにやっていたのに、今度店を出したら七年も年期を入れた仕事に自信を失ってしまい（新しい仕事は商人なので外交に行かなければならないのですが）、外交に行っても人と接するのにビ

クビクしてしまって、話をスムーズにすることができなくなってしまったのです。それで私と長女と次男とで一生懸命に助けて外交をして、どうにか一年やりました。しかし長男が外交に行っても仕事を頼みに行っても相手に反感を持たれて、人との接触がうまくいかないので、去年（四十三年）から店を閉めて、二人の息子が少しの間もとの仕事をやるようにしました。そして主人とは去年の六月頃から別居し、食事だけ食べに来て、お弁当を持ち、定期を買って近くの温泉に行っています。

私は去年の四月に〝テレパシー〟を買ってから毎日一生懸命読んで色々な原因がわかりましたので、息子も大変良くなってきました。私も毎日ぐっすり眠れるようになり、ビクビクするのもなくなってきました。この本を読んで今まで理解力が足りなかったことがはっきりわかりました。新しい仕事も自信を失っていたので休むようになってしまいましたが、おかげで自信が少しずつついてきましたので、また四、五月頃から店を始めるつもりです。今度は全員で自信をもって進めると思います。それに私は四十代から白髪が多くなり、毛も少なくなってしまいましたが、この本を読んだり、色々お送りいただいた本を一生懸命読んでからは、黒い毛が出てき、また毛も多くなりました。息子も頭髪がうすくなっていましたが、今では毛が多いくらいになりました。まるで奇蹟だと家中みんなで喜んでおります。ほんとうに有難う御座いました。家族全員がいつも大変喜んで感謝しております。

これからは宇宙の方へ目を向けたいと思いまして望遠鏡を買いたいと思います。素人が二階の物干しから見るのにはどういうものを買ってよいか御指導をお願い致します。

長い間解決ができなかった物事をアダムスキー氏の色々の本のために解決することができ、一家全員救われました。久保田様が翻訳して下さったおかげで、こちらが勉強できた事を深く感謝致します。

編者注＝右の手記は一例にすぎないが、これに類した報告類は過去多年のあいだ全国各地の読者から寄せられた。その殆どをこれまでに掲載しなかったのは本誌の紙面の都合によるものである。〝生命の科学〟を読んで難病が治ったという人もあるし、〝宇宙哲学〟を熟読して事業が好転したという人もあった。ア氏の教え（それはブラザーズの教えであろうが）が単なる机上の空論や茫洋たる観念論でないことは、右の一篇の報告によってもうかがい知ることができる。もちろん海外でもア氏の一連の著書を読んで不思議な体験を持った人が多くいる。ア氏の哲学が〝個人を変化させる力を帯びたもの〟であることは今や明確であり、われわれがア氏を真実の人と断ずるのはこの点にある。

テレパシーを植物、動物、人間に応用した実例をあげた。知らせる運動を広く展開するためには、現実の生活に役立つ事実を数多く大衆に知らせることが大切である。

思念と奇蹟

巽　直道

アダムスキーは一九六五年四月二十三日に他界しました。彼の使命に気づいていた人びとはがっかりしました。彼を通して宇宙人から学ばなければならない問題が山積しているのに、そして、九十才、百才までもかくしゃくとしている人びともいるのに、なぜ、あんなに早く死んでしまったのだろうと、不思議がる人もいました。私もその一人だったのですが、次のように理解したのでありました。

一、釈迦が仏道を説いた二千五百年の昔から、ほんとうはもっと大昔から、宇宙人は地球人を指導しつづけてきた。その指導がどんなものであったかは仏典や聖書にしるされている。

一、ニュートンが引力の法則を発見して以来、地球人の科学は急速に進歩した。しかし、特に指導を強化する必要を認めなかった。今までに説いてきたことで充分だったからである。

一、ところが、地球人が原子力を開発するに及んで事情は一変した。今までの指導を強化しなければならなくなった。しかもそれは急ぐ必要があった。そこで、アダムスキーを選んで地球人に新しい知識の数かずを伝えた。

一、彼は忠実に使命を果した。そして地球人の現段階で必要なことは説きつくした。あとは地球人の実践を待つだけになった。つまり、彼の使命は終ったというろけである。

一、使命の完了を知った彼は、地球人の現状と未来とに心をひかれながらも、精神と肉体の酷使から解放されることを望んだことだろう。彼が希望したというよりは、宇宙人から休息をすすめられたというほうがほんとうかもしれない。

一、もし使命が終っていないようなことであれば、風邪から肺炎になったとき、彼自身で、それを治すのはなんでもなかっただろうし、かりに治せなかったとしても、宇宙人がほっておくわけがないからである。

彼が他界してから、早くも四年がこようとしています。第二のアダムスキーの出現を期待する気持が、誰にも強いのではないかと思いますが、その熱意を転換して、彼の哲学を自分のものにするように努めると同時に、地球の人類のために、彼が伝えてくれた知識を、一人でも多くの人びとに知らせなければならないというのが、以上の理解から得た結論でありました。これは誰もが到達している平凡な結論にすぎないでしょうが、彼の使命の完了をはっきりと認識するか、しないかでは、実践面における信念に大きなちがいがあるのではないでしょうか。彼の死を、使命遂行の挫折と考えている人がいないとはいえません。

宇宙人がアダムスキーを介して説いた教えは、基本的には目新しい教えではありません。たとえば、宇宙には人間が住んでいる天体が無数にあって、それらのほとんどは地球よりも進化していることを阿彌陀経は説いています。空飛ぶ円盤のことは聖書に出ています。他の天体から地球に生まれかわることは維摩経にもあります。意識は万物の実体そのものである（宇宙哲学二十六頁）

という教えは真言密教の根本と共通しています。テレパシーは六神通の一つである他心通として、古くから知られています。想念を変換させるならば肉体をも変換させる（本誌第三十七号一頁）ことは新約聖書や般若心経に示されています。これらの古い教えも、多分、宇宙人が説いてくれたのでしょうが、そのほとんどは、いつの時代でも〝信じがたき〟教えでありました。一例をあげますと、前記の阿彌陀経には「一切世間のために、この難信の法を説く」とあります。

科学のない昔でさえ、そうであったのですから、科学的常識を超えた宇宙人の教えを、科学一辺倒の人びとに受け入れてもらうのは容易なことではありません。仏教がいっている

無上甚深微妙法（無上・甚深・微妙の法は）

百千万劫難遭遇（百千万劫、遭遇しがたし）

この言葉が、そのままあてはまります。またイエスがいっているように、

聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう。（マタイによる福音書第七章）

というようなことが起らないとは限りません。ですから山上の垂訓の冒頭でイエスは、

こころの貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである。（同第五章）

と教えています。心の貧しい人びとだけが、宇宙人の教えを受け入れて、天国を自分のものとすることができるのですが、地球人の大部分は心の富める者です。科学で心を富ませている人びとを導いて、こころ貧しくなってもらうことが、知らせる運動を成功させる必須条件です。この条件を充たすことができるか、どうかによって、GAPに与えられた使命を果せるか、どうかがきまります。山上で教えを説いたとき、イエスの口から出た最初の言葉が、ここでも確認されなければなりません。

それならば、この必須条件をどうすれば満足させることができるのでしょうか。それは開経偈（かいきょうげ）の後半に示されています。

我今見聞得受持（われいま見聞し受持することをえたり）

願解如来真実義（願わくば如来の真実の義を解きたまえ）

如来（にょらい）はタターガタの訳。真理（如・ありのままの真実）に到達したものという意味と、真理より来たったもの、即ち真理に従ってこの世に来たり真理を示す人という意味との二つがあります。漢訳では後者をとり、如より来生（らいしょう）したものというので如来としました。真理に到達している者といえば、私たち地球人からみると、アダムスキーとコンタクトした宇宙人の長老が、それにあてはまるでしょう。ですから、宇宙人の長老や、地球上に生まれかわった聖なる人を如来と思ってよいでしょう。如来という言葉そのものが、古くから、宇宙人であることを示唆しているのに深い感銘を覚えます。（新仏教辞典による）

無上・甚深・微妙といったような、最上級の形容詞をつけることのできる如来の教えには、百千万劫といわれるような長い長い年数のあいだに、なんべん、生まれかわってきても、めぐり

あうことはむつかしい。なぜ、むつかしいのだろうか。それは地球人の常識よりも一段階高い超常の教えだからである。

ここまでが開経偈の前半です。劫（こう）とはカルパの音写である劫波の略語で、きわめて永い時間のことをいいます。したがって百千万劫という言葉の中に、生まれかわりの意味が含まれています。次は後半です。

如来の教えに難遭遇であったこの私も、自分の二つの目で見、自分の二つの耳で聞くことができたとき、〝なるほど〟と感銘、そのとたんに受持することができました。どうぞ如来の真実の義を、この私にもお解き下さいませ。

このような謙虚な気持になった人びとだけに宇宙人のことを知らせてあげなさい。そうでない人びとに、高遠な宇宙哲学を説いてみても、また、空飛ぶ円盤目撃事件を数多くならべてみても、それは無駄な骨折りである。知らせる運動を成功させるためには、まず、心の富める人びとを心貧しくさせることに全力を集中しなさい。その方法は見聞受持だ、というのがこの開経ゲの主眼点です。それでは見聞とは、何を見、何を聞くことなのでしょうか。イエスは次のようにいっています。

すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。良い実を結ばない木はことごとく切られて火の中に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである。（マタイによる福音書第七章）

見聞の見は、この実を見ることです。聞は、あの木にはこんな実がなっている、という話を聞くことです。実とは次のことわざにある桃李（とうり）のことです。

桃李〝ものいわねど、その下〟おのずから径をなす。

うまい桃やスモモがなっていると、人びとは草木の茂みをかきわけて、その木のところまでやってきます。桃李を持ち帰った人に出会うと、そのありかを聞きたくなるのが人情というもの、そして遠くからでも、それをとりに出かけます。ですから、その木の下には小道が自然にできるというわけです。ここに、知らせる運動の秘訣があります。

宇宙人がアダムスキーを通して伝えてくれた知識は、大部分の地球人にとっては未知の木です。単なる好奇心から飛びつく人もいましょうが、そんなのは論外です。

にせ予言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。（同上）

とイエスがいっているように、にせ予言者にだまされつづけている人びとのほとんどは、これは良い実がなる木だと力説してみても、言葉だけでは対手にしてくれないのが普通です。現実に、その木に良い実をみのらせて、見聞してもらう必要があります。開経ゲが見聞受持と教えている理由がわかるというものです。

宇宙人が与えてくれた未知の木に、どんな良い実をならせることができるのでしょうか。それは個人を喜ばせる小さな実から、地球を楽園にする大きな実まで、さまざまです。主目的は後者にあって、地球人を進歩向上させて、地球を宇宙人の世界にまで導き上げるにありますが、しかし今、必要としているのは、宇宙人の教えにソッポを向いている人びとの顔を、こちらに向けさせる

ことなのですから、つまり知らせる運動を効果的に展開させるためですから、大衆の一人一人が舌つづみを打つような、うまい実でなければなりません。

その実の一つにテレパシーの活用があります。アダムスキーは次のようにいっています。

人間と無生物とのあいだのテレパシーによる伝達につきましては、いわゆる植物栽培の名人といわれる人を好例としてあげることができます（中略）この場合、この人たちがテレパシーを応用していることを自分では気づいていませんけれども、意識をもたないように見える植物でさえも、人間の心からそそがれる愛情にははっきりとこたえているのです。この種のテレパシーは人間にほとんど理解されていませんし、全然といってよいほど意識的に応用されていません。（テレパシー五十八頁）

この教えを実践に移して、菊の栽培に大きな収益をあげている農家があります。神戸市兵庫区山田町東下、前田はるえさんです。そのときの私の指導は次のようなことでした。

「人間はテレパシーする。動物もテレパシーする。植物もテレパシーする。だから、わが子か、弟妹にたいするような愛情をこめて栽培すると、成育を早め、開花を促進することができる。具体的には、信念をもって次の四つを実践することである。

一、畑に行ったら、よく育っている菊を見渡して挨拶と感謝の言葉とを与え、『心安らかに、まごころをこめた私の世話を受け入れてくれ』といったような意味のことを、人に話すときのように語りかけること。

一、手入れしているあいだは『育つ、育つ、立派に育つ』と、たえず語りかけること。時には軽音楽を流すとよい。

一、しかしいちばん大切なことは家庭の和である。いらいらした気持で畑に出るのは禁物である。それを感じとった菊は、恐れおののくだろう。

一、だが家庭をいつも楽しい雰囲気に保つのは容易ではない。家族全員が神にたいする感謝と祈りの生活を営むことが望ましい」

その結果について前田さんは「一段歩を超える菊づくりは大変いそがしい仕事ですが、開花が一週間ばかり早くなりました。開花の促進は、それだけ出荷が早くなり、他から出廻り始める頃には出荷が終っていますから、当然、何割かの増収になりました。次つぎに出荷できるように幾種類もつくっていますが、みんなそうなりました」と、手記にしるしています。これは第一年目の事実ですが、それから十年、毎年よい収益をあげています。

以上は植物の一例ですが、今度は動物の例を一つだけあげてみましょう。アダムスキーは次のようにいっています。

「あなたが見知らぬ犬の方へ近づくとします。そのとき犬はすでにあなたの心中を察していて、犬を傷つけるつもりならばただちに身構えますし、可愛がるつもりならば尻尾を振って近寄ってきます。ここには音声というものはなく、すべて印象の交流があるのです」（死と空間を超えて、六十頁）

神戸市兵庫区山田町衝原の小河猶太郎さんは次のような手記をしるしています。この場合は犬ではなくてマムシです。

「私は農業と炭焼業とを兼ねている。したがって、田や山に出かけるのが仕事だが、毎年三—五匹のマムシをとり、皮をむいて、竹に巻きつけて保存していた。精のつく薬として希望する人が多

いからである。ところが、ほんとうの信仰を自分のものとすることができた頃から、マムシを見ることがなくなってしまった。それからもう五年たつ。村の人たちは以前とかわることなく毎年、何匹かのマムシをとっていることから思うと、数が減ったからでないことは確かである。そこで私は、これこそ観音経にしるされている自回去（じえこ―自らまわって去る）だと思うのである。

マムシのいるところは、たいていきまっているのが普通だから、そこにいるのをとっても、一ヵ月もたつと、また別のマムシがきている。一匹ずつ勢力範囲を持っているのかもしれない。そんな場所が何ヵ所もあるのに、五年間、一匹もお目にかからないというのは、その場所を通ろうという私の想念を受信して、自らまわって去るとしか思えない」

ほんとうの信仰は自他平等観を植えつけ、恐怖と殺傷の気持をなくしますから、このようなことが起きても不思議とはいえないでしょう。アダムスキーは次のようにいっています。

（金星の動物は）全般に地球の動物に似ています。しかしいわゆる兇暴な野獣はいません。地球では人間が絶えず動物を恐怖しているために動物が兇暴になったのです。他の各惑星ではすべての動物は人間の仲間であって進化の過程にあります。そしてその資格で真価を認められているのです。（死と空間を越えて、六十二頁）

テレパシーの活用について、植物と動物との例を一つずつあげましたから、次は人間の一例についてみてみましょう。アダムスキーは「あなたもテレパシーによる意志伝達ができる」（死と空間を超えて、五十九頁）といって、自分の実例を次のように語っています。

一九五三年二月十八日に、私がその町（ロサンジェルス）を訪れたのは、ある種の衝動を感じて、何となく引寄せられたからである。（空飛ぶ円盤同乗記、三十五頁）

次に報告するのは、この「引寄せ」によって困難な問題を解決した実例です。

神戸市兵庫区塚本通六丁目二二の上地しげさんは、Aという人から頼まれ、その人を保証人として相互銀行から金を借り、その金はその人が使った。返済は、Aが毎月掛けていくという約束であった。Aは良い人で、以前から親しくしていたから、上地さんは安心しきっていた。ところが、Aは家計不如意で掛金を怠りがちになった。上地さんにも、それを埋め合わせる金がなかった。そしてついに自宅を差押えられてしまった。いつ競売されるかしれないのに、対策のたてようがないという不安の連続で、ついに心臓病になってしまった。発作がおこると、寝ているフトンが大きく波立つというほどであった。医者にかかり続けたが、いつ治るという見込みはなかった。それどころか、病勢はますます進んでいくように思われた。

そんな状態のときに、人に教えられて私のところにやってきたのであった。弁膜症、肥大症、狭心症といったような心臓病は、病気そのものにたいするマイナスの感情が大きく働いているのだから、その感情をプラスに転じるとすぐ治る。上地さんの心臓病も例外ではなく、簡単に治った。しかし自宅は差押えられたままである。これを解除しておかなければ、早いか、おそいか、必ず再発する。Aと相談して銀行に交渉するより外に手段はない。と

ころがAは行方をくらませてしまって、今どこにいるかわからないということであった。そこで私は次のように助言をした。

『行方をくらませている人を見つけるのには、常識的には、いろんな方法でさがすより外に手はない。ところが、般若はテレパシーの活用を教えている。（般若〈はんにゃ〉はパンニャーの音訳。如来すなわち宇宙人が地球人に授けた知恵のことであって、地球人の知恵と区別したほうがよい場合に使われている）私が取り扱った実例に次のようなのがある。

「主人は田植の前と、秋のとりいれの前になると、金を持って家出し、多忙な時期が終ったころに、ふらりと帰ってきます。今度も家を出てしまい、どこに行っているのかわかりません。何とかつれもどすことはできないものでしょうか」

右は初めて訪ねてきた農家の婦人の訴えであった。私は次のようにいった。

「主人の所在はすぐわかる。しかし、それには一つだけ条件がある。それはザンゲだ。主人が悪いと思っているその心を転じて、ああ、私がわるかったと悟らなければならない。むつかしいことだが―。ひと晩、よく考えてみることだ」

その翌日もやってきた。そこで次のように指示した。

「ザンゲができたら、心をらくにして、わかる、わかる、所在がわかる、きっと所在を知らせてくれる、と念じ続けなさい。そうすれば、何かの形で反応がある」

これは見事に成功した。三日目に、〝城崎温泉にきている〟と、叔父さんのところへ連絡してきた。テレパシーのすばらしさに驚嘆しながら、すぐ迎えに行ったのはいうまでもない。

想念はエネルギーである。この部屋に掲げてある念写でよくわかるだろう。また知性があるようである。なぜならば、東京から念写しても、ここにあるフィルムに写るのだから―。したがって想念を送れば、あなたの希望どおりになる。所在を知ることもできるし、Aを引き寄せることもできる。その方法は心臓病を治したときの反復思念の技術である。ただし、あなたの場合にも条件がある。ひどいめにあっているのだから「Aを見そこなった。あんなわるいやつはない」と思っているにちがいない。それでは希望はかなえられない。だから、それをプラスに転じることが先決である。その方法はやはり反復の技術である』

他に解決策を持たない上地さんは、私の助言を熱心に実行したことはいうまでもありません。その結果について次のように語っています。「一週間たった夕方でした。表戸があいたとき、きてくれた！ と直感しました。今晩は、の声を聞いたときは、思わず飛び上がりました」と。

以上はテレパシーという良い木にみのった三つの良い実です。常識を超えたこのような良い実を見聞すると、多くの人びとは心貧しくならざるをえません。これが知らせる運動を成功させる急所です。宇宙人が授けてくれた知識には、以上の三つの実より、もっと良い実をならせることができます。それは大衆が望んでやまない、うまい実ですが、次の機会にゆずることにしましょう。

果然大反響をまき
起こした問題の書！
絶讃刊行中！

死と空間を超えて

A 5 判・186ページ
¥500・〒65

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎　訳編

☆ジョージ・アダムスキーが"空飛ぶ円盤の真相"刊行後，1965年4月に他界するまで定期的に発表し続けた体験記や論説のうち本誌に掲載したものすべてをあらためて一冊に収録した貴重な書．

☆金星旅行記・土星旅行記を含む数十篇の記事を第1部とし，第2部にはアダムスキーから編者宛の未発表書簡多数を掲載．アダムスキー直接執筆の文献邦訳版としてはこれが最後．

☆編集に際しては訳文を更訂して発表年代順に集録．本格的活版印刷（タイプ印刷にあらず）．本文8ポ．上質紙使用．

☆少数限定版につき早目にご注文のほどを．なるべく振替をご利用下さい（久保田八郎個人宛）．2冊入手して1冊を知人に贈るもよく，2冊で送料115円，3冊以上の一括注文は小包便となり，第1地帯120円，第2地帯160円，第3地帯230円．一括10冊以上のご注文の場合は送料当方負担の上1冊余分に贈呈．

新時代のバイブル！

生命の科学

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎訳
¥300 〒55

人間の第二の生まれかわりの重要性に言及し，その方法を明示して，宇宙の意識の大海中に没入させることによって奇蹟と幸運をもたらす福音の書．

申込先　日本GAP　久保田八郎

生命の新生をもたらす

宇宙哲学

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎訳
¥300 〒45

会員間で絶讃を博したこの名著もついに品切れとなった．再版は未定．

日本GAP副機関誌（月刊）

宇宙同好通信

年極送料共¥1,000
申込先　東京都豊島区雑司ガ谷1丁目29番17号，安斎純夫

日本GAPニューズレター旧号

33，34，35号（以上各¥130）36，37号（以上各¥150）　送料各¥35
一括注文の場合は送料当方負担．久保田宛ご注文のこと．

1—2，3，4，5，6—7，8—9，10—11号の謄写複製本が下記に在庫（各送料共¥135　1—2は1冊本，他も同様）
申込先　東京都大田区調布千鳥町1—16—15紀陽荘内　桶元幸二

季刊専門誌　テレパシー

主宰者市村俊彦氏は物理学会々員．物理学の立場からテレパシーを科学的に研究される．入会金¥200　会費年額¥800　申込先　新潟県中蒲原郡横越村横越　超心理研究会（振替新潟2502）

編集後記

◎本号は趣向を変えて〝テレパシー特集号〟とし、会員各氏の貴重な体験記を掲載しました。ただしいわゆる心霊的な怪奇な体験は本会の採るところではありません。

◎「テレパシーこそすべてである」の今野喜一氏（札幌）は北大教養一年の学生で、昨年来すばらしい体験記をたびたびよこされますが、本号の記事はその一部です。テレパシーを学業に応用して成果をあげておられます。

◎「テレパシーの体験・実験記録」の山本佳人氏（東京）は一流校進学を目指す予備校生。高校時代から非常に熱心に宇宙哲学を研究してこられた方で、相当なテレパシーの能力を持たれるようです。

◎「テレパシーの特異な体験」のいぶきのり子さん（東京）は某医大付属病院勤務の看護婦で、ペーテル・フルコスに似たこの異常な体験は甚だ興味深いものです。精神感応力が肉体器官の物理的変化によって生じるものか、それとも外部の何ものかの作用が働いたのか、とにかく珍しい現象です。

◎「テレパシーを読んで救われた」の堀川ときさんは本会々員堀川栄子さんの母堂。素朴な表現のなかに真実胸を打つものがあります。その手記はしっかりした文章で、人柄がしのばれます。

◎「毎十分想念観察法」は今もって編者が最良の方法と信じているもので、もっと詳細を知りたい方は編者宛直接ご照会下さい。

◎「思念と奇蹟」の巽直道（たつみじきどう）先生（神戸）は〝直道会〟を主宰されて、反復思念法の指導により多くの難病や人生上の難問題を片っぱしから奇蹟的に解消し、現代のキリストと讃えられるかくれた聖者です。アダムスキーをこよなく尊敬される先生は早大理工学部電気科出身の元技術者で宗教家ではなく、その論理もきわめて科学的で明快であり、ガン・カリエス・中風・心臓病等の難症を短時日に（早いときは数時間で、または瞬時に）治して下さいますから、難病持ちの方で詳細を知りたい方は左記宛直接にご相談下さい。

神戸市兵庫区矢部町五三　直道会　巽　直道

◎先号掲載の論文「量子流体宇宙船」は難解にすぎたためにもっと平易な解説をという声によって再び本号に「UFOの推進力」と題する一文をお願いしました。村山光一というのは清家新一氏のペンネームです。中学生にもわかるようにとお願いしたのですが、これ以上平易には書けないということでした。実験は着々と進展しているそうで、先号掲載の論文を米国のアポロ計画の指導者でロケット開発のパイオニアーとして有名なフォン・ブラウン博士が激賞しています。村山氏により円盤の推進力の秘密はある程度解明されたといえるでしょう。

◎本号32頁（PRの頁）の下段右下に出ている季刊誌「テレパシー」はこの方面の科学的な研究誌として希少価値の高いものです。本会では取り次いでいませんから申込先へご注文下さい。市村氏はこの他にも研究紀要「超常現象の諸問題」を刊行しておられます。物理学に強い方には好資料です。

◎本会東京支部の月例会については本誌第35号の〝編集後記〟をごらん下さい。

◎群馬県立大泉高校教員三田堯一氏はGAP提供の円盤スライドを校内で二五〇名の生徒に公開して大好評を博したというご報告をいただきました。ご努力に厚く御礼を申し上げます。

◎集会用の円盤スライド借用希望の方は日本GAP東京支部の、安斎純夫（東京都豊島区雑司ガ谷一丁目29番17号）宛お申込下さい。解説用録音テープと共に無料で貸出します。

◎本誌を何とかして元通りの隔月刊にするよう努力しています。それには何といっても資金回転の円滑化を必要としますので、会費切れの方は早目にご送金をお願いいたします。

◎次号は再びUFO関係記事を満載します。ご期待下さい。（久）

日本GAPニューズレター1969　第三八号

翻訳編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP

（郵便番号698）　島根県益田市益田古川

振替・松江　二六三〇（久保田八郎個人名義）

頒価一五〇円・送料三五円

昭和44年3月30日発行

不定期刊

☆禁無断転載